

## ワイタム森と演習林

石田 健

フィールドワーカーが研究を始めるにあたって、調査地選びは研究テーマ選びの次にくる大事な作業だ。適した調査地が得られなければ、研究テーマの変更さえ余儀なくされる。利用できる調査地が先に決まっていて、その調査地に適した研究テーマを選ぶことも多い。

私が大学と大学院時代に調査地として足しげく通った山梨県山中湖村の東京大学富士演習林周辺は、キツツキ類の採食生態を近縁種間で比較したり、それと環境との関係を調べるという研究テーマに適した場所として選んだ。大学院時代の最後にいた、東京都田無市の東京大学演習林田無試験地は、大型実験ケージをつくってアカゲラの採食行動に関する飼育実験ができる場所として選んだ。そして、現在、私が主な調査地としている埼玉県大滝村の東京大学秩父演習林は、先にありきの調査地である。つまり、ここに任官されたから、ここで調査するのがいちばん都合がよいからそうしている……ともいえる。

ただ、私のように身軽に飛び回るのが得意な人間にはこのような勤務地が最適だろうという周囲の判断も、この結果に大きくきいているだろうし、私の研究歴が就職先につながったわけで、ここはここでひどく気に入っている。もちろん、自分自身の動機とは別に立場上の動機や外から転がり込む研究も多く、他所へも調査にでかける。一般的にも、心底好きな研究テーマだけに思う存分打ち込める才能と運に恵まれている研究者はまれだろう。

それはさておき、野外調査の結果を報告する論文には必ず「調査地」という項目がある。鳥類の研究であれば、南極から北極圏まで、あるいは大洋から高山まで、鳥の生息範囲の広さを反映して調査地もありとあらゆるところに広がっている。そのように論文で紹介される無数の調査地の中で、私にとって昔からもっとも印象深い場所の1つが、イギリスのワイタムの森である。印象深いというより、うらやましいといったほうが正直な気持ちかもしれない。



ニュージーランド南島・Arthur's Passにて (手前はミヤマオウム)

## 巻頭言

ワイタムの森周辺は、生態学祖の一人エルトンが中心になって創設したオックスフォード大学所属の研究施設で、さまざまな生物を研究対象とする研究者が世界中から集ってひとつところで調査している。蟻山がシジュウカラの採食生態を調べたとき、食物となるシャクガのリストや発生消長を調べている別の研究者がいて参照できたり、サザンがモリフクロウの個体群動態を調べたとき、やはり餌になるノネズミの個体群動態をエルトンたちが長年調べていたり、あるいはシジュウカラ類の巣箱を利用した個体群研究が代々継承されて何十年もつづいている。

私の所属する大学演習林は、少しワイタムの森に似ているかもしれない。秩父演習林にはほぼ6000haの森林があり、標高2400mから240mにわたって気象観測を行っている。落ち葉や落下種子が継続調査されていて、クマの糞から食性分析しようという研究者がいる。ひとつの沢では、降雨量と沢の流量の観測、水質の継続観測、水棲昆虫群集と落葉の分解に関する研究、カワガラスの繁殖生理周期の研究などが行われている。それぞれの研究成果は、お互い有機的に結びつくことだろう。

また、演習林の「財産」を管理する目的で植生に関する資料が長年にわたって蓄積され、地図なども完備されていて利用できる。衛星画像を解析して植生を分析したり、コンピュータグラフィックスや地理情報システムを利用して景観解析をしようという研究者もいる。それらの結果を、手軽に参照できるデータベース・地理情報システムやコンピュータ通信網をつくらうとしている研究者もいる（私もそこに入っていて、その分雑用も増えるが……）。

でも、ワイタムの森とはかなりちがう。あちらは、エルトンが動物個体群の研究集団を生み出すことを目的として創った所で、大きな意味の研究目標が先にあった。演習林は、もともと林業それも人工林の育成を主な目的として創設された施設で、社会環境の変化にともなって、特に天然林の割合が3分の2以上と多い秩父演習林では、天然林や野生動物の生態学的な研究が重要な研究テーマになりつつある所である。その結果として、生態学や森林保安をテーマとする研究者の有機的なつながりはまだ希薄だし、ここでの研究も活発とはいえない。

演習林をワイタムの森のような調査地にできる下地はありそうだ。長期的に、研究を目的とした管理下に置かれることが保証されている広い陸上のフィールドは、日本では大学演習林だけだろう。そういう場を足がかりにして、生物が環境をつくるように、多くの研究者が利用したいと思うような調査地をつくることも、私のような研究者の「ニッチ」だと感じている。

今、研究領域の境界が大きく変わろうとしているように見える。一昔前までは、専門分野の細分化が進んでいたようだが、今は再編成が進みつつある。分子生物学の研究手法がかなり確立し、その一部がフィールドワーカーにとっても割合に活用しやすいものになってきたり、実験生物学者たちが環境保全や野生生物の生態にも興味をいだくようになってきている。人口増加と浪費的生活習慣がますます進み、人にとっても地球がいよいよ手狭になってきたという危機感が社会に広がっていることも関係があるだろう。

エルトンたちは、ワイタム森周辺の調査地を活用して個体群生態学という研究分野を確立させた。そういう意味でのはっきりとした学問的目標は、残念ながら私にも演習林にもない。しかし、演習林という場を活用することによって、学問的にも新しい研究領域や研究手法の確立に寄与できるだろうと信じながら、私は日々たち働いている。

エルトンやラックには遠く及ばないまでも、大面積プロットやフィールドステーションを設置したり、生物資料を新鮮なうちに調整できる実験施設を整備したり、蓄積されているデータを参照しやすくするという形で、あるいはいろいろな人と共同研究することで、ごくゆっくりではあるがワイタムの森を目指して、すてきなフィールドづくりに努めている。後は、仲のよい研究者がたくさん集まれば、なにかが生まれるだろう。これを読んで、大学演習林で調査を試みようかと思いつく方が一人でも現れれば幸いだ。

(東京大学秩父演習林)

## 論争は見苦しいか？ 藤岡一佐野論争に思う

上田 恵 介

日本鳥学会誌 vol. 39 (no. 1) に佐野昌男氏の北海道利尻島におけるイエスズメの繁殖に関する報文が載った。これに対して藤岡正博氏が、掲載された写真はニュウナイスズメの幼鳥ではないかと学会誌 vol. 40 (no. 3) でクレームをつけ、これに対する佐野氏の反論が同時に掲載された。

欧米の学会誌では、こうした論争はごく普通のことであり、それが学界の雰囲気を作り上げ、研究者の論文に対する厳しい姿勢を養うという一面を持っていることは周知の事実であるが、筆者の知る限り、日本鳥学会誌上でこうした研究上の論争が行なわれたことはなかった。これでようやく日本鳥学会誌も欧米並のレベルになったかと喜んでいたら、学会誌上でこうした論争は見苦しいからやめろという意見があると聞いた。

おそらく一人ならず、会員の何人かは、こうした意見をもっておられると思う。だがこうした科学上の論争のどこが見苦しいのだろうか。藤岡氏は決して佐野氏を中傷しようとか、落しめようとかいう意図で批判を書いたわ

けではない。もしイエスズメが北海道に侵入・繁殖したのが事実なら、農水省としてそれは（おそらく何億円もの予算に関わる）重要な問題である。その農水省の研究者として、当然、藤岡氏はこの批判を書かねばならなかったのだと私は理解している。

もちろん論争はフェアにおこなわれなければならない。それだからこそ、編集委員会は佐野氏に反論の機会を与えているのである。ただ佐野氏の反論は藤岡氏の指摘に正面から答えていない（私としては、この件について藤岡氏の再反論と、そしてもし繁殖が事実なら、もっとはっきりした証拠をもって、利尻島におけるイエスズメの繁殖を立証する佐野氏の報文が載ることを期待している）。

批判と中傷、論争と喧嘩の区別がつかないのが日本社会の一面であることは、我々が折りにふれ目にするのであるが、少なくとも我々の学会では、今後とも科学的論争がフェアにのびのびと、そしてアクティブに行なわれることを期待している。

(立教大学)

佐野昌男 1990. 北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認. 日本鳥学会誌 39: 33-35.

藤岡正博 1992. 佐野昌男氏による「北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認」は、雄1羽の渡来記録である. 日本鳥学会誌 40: 112-113.

佐野昌男 1992. 藤岡正博氏による「北海道利尻島におけるイエスズメの生息確認」の反論に対する見解. 日本鳥学会誌 40: 113-114.

## 関連学術集会 (1993)

- ◆ 9月1～9日 第23回国際行動学会議 (スペイン: no. 46)
- ◆ 9月20～24日 第6回国際ライチョウシンポジウム (イタリア: no. 46)
- ◆ 10月1～3日 個体群生態学会シンポジウム (支笏湖)\*
- ◆ 10月9～11日 日本鳥学会大会 (愛媛大: no. 47)
- ◆ 11月20～23日 日本動物学会大会 (琉球大)\*
- ◆ 12月1～3日 第16回極域生物シンポジウム (極地研: 本号)

## (1994)

- ◆ 8月14～20日 第5回国際行動生態学会議 (ノッティンガム: 本号)
- ◆ 8月20～25日 第21回国際鳥学会議 (ウィーン: 本号)
- ◆ 8月20～26日 第6回国際生態学会議 (マンチェスター: 本号)

関連分野の学会大会・シンポに関する情報をお知らせ下さい (※切: 2カ月前)

\* 印のものについては編集委員にお問い合わせ下さい。

## 若手インタビュー

### 成末編集委員の 若手研究者インタビュー(9)

#### 黒田治男さん

1999年3月に津戸基金シンポジウム「鳥の学習と文化」が開催された折り、兵庫県から遠路はるばる参加した、熱心な若者がいた。黒田治男さんである。

昭和36年に兵庫県に生まれ、ご尊父の影響で物心ついたときから鳥を見ていたという。小学校の頃に、裏山などでエナガやウグイスを観察し、中学校では鳥仲間を求めて西播愛鳥会に入会した。縁あって私も同会の会員であるが、会報にしばしば投稿している同氏がこんなに若いとは知らなかった。

黒田氏が育った時代は、日本列島改造のさなかであった。瀬戸内海地方においても、シギ・チドリ類の宝庫である海岸線は埋め立てられて工場地帯となり、サシバやブッポウソウが繁殖していた山林は、切り崩されて高速道路やゴルフ場が変わっていった。黒田氏の

フィールドノートは、期せずしてこれら失われていった多くの鳥たちの墓標を刻むことになったのである。

黒田氏は、現在NTTのデジタル交換機のソフトを開発する仕事に携わる一方、フィールドノートのまとめの第1歩として「ヤマセミのとまり場の利用様式」(Strix Vol. 10)を発表された。今後の課題として、是非環境の変化と鳥類の移り変わりについて蓄積された情報を整理し、発表されていくことを期待している。



### 私のフィールドアイデア 糞拾い

#### 小藤弘美

河川の石や岩の上からカワガラスの糞を先の細いピンセットで拾います。糞を拾う時は砂粒や枯草などいらぬものはピンセットで除いて下さい。なるべく新しいものが理想ですが、乾燥したのも大丈夫です。拾った糞は5cm四方ぐらいに切ったアルミホイルに葉包紙に包む要領で包んでビニール袋に入れます。最近は便利なポリ袋があって、チャック

付きポリ袋ユニパックを使っています。8.5×6cmの大きさのものをアルミホイルと一緒に野帳に挟んでいます。水分の少ない糞ならアルミホイルに包まずにそのまま袋に入れてもいいでしょう。別にポリ袋でなくてもフィルムの空いたケースやプラスチックのサンプルビンなどに入れてもかまいません。採集した日付、時刻、雌雄等をラベルに書きます。持ち帰ったら普通の冷凍冷蔵庫の冷凍庫に入れておけば、半年やそこらはステロイドホルモンの測定は大丈夫です。

(早稲田大学)

## 第16回極域生物シンポジウム

第16回極域生物シンポジウムが12月1日(木)から3日(金)にかけて、東京都板橋区の国立極地研講堂で開催されます。1日の午前は「日加相補性研究によるサロマ湖、レゾリュート研究計画」、2日の午前は「海水圏生物の総合研究計画」、3日の午前は「昭和基地周辺における陸上無せきついで動物」をテーマとした講演があります。3日間とも午後はポスターによる一般研究発表が予定されています。詳細は下記にお問い合わせ下さい。

〒173 板橋区加賀1-9-10、国立極地研究所 生物シンポジウム係

TEL: 03-3962-4711 (内 363)、FAX: 03-3962-5743

コスタリカ通信(2)

直木一弥

先号で記録鳥種 850種と書いたが、その全てがコスタリカで繁殖するわけではない。熱帯の鳥相の特徴の1つとして留鳥の割合が多いのは確かだが、一年中気温が変化しないため餌量が比較的安定しており長距離の南北移動、いわゆる渡りは必要ない、コスタリカの鳥相は630種の留鳥(水鳥40種)と220種の越冬・通過種(水鳥120種)とに大別できる。しかし、この630種がどこでも観られるというわけではなく、12に分けられる植生区の数区にしか生息しないことが多い。記録種数の最も多い La Selva で 268種、私のいる San Jose で 95種 (Stiles 1983)、188種 (Stiles 1992) と、日本と比べて鳥類の多い割に一ヶ所では種類が観にくい気がする。そのかわり San Jose からバスで2時間も移動すると全く異なる鳥相が観察できる。熱帯低地雨林のアリドリ、オオハシ、コンゴウインコ、カリブ海側中腹の青、黄、緑鮮やかなタネジャラの混群。熱帯高地雲霧林のケツァール、トロゴン類、マングローブのサキ、トキ、カンサンドリ。

このコスタリカの鳥相の豊かさの要因の1つとして、その地史が挙げられる。中米の起源は新しく、火山の爆発と海底の隆起によって500万年前に中米が出現した時、すでに南北アメリカ大陸には全く異なる動植物相が存在していた。それらが地峡の完成と同時に反対の方向に流れ込んだのだから、その時起こった新しい環境への適応放散、相互干渉による大規模な絶滅(例えば南米の有袋類)は想像にかたくない。南米大陸からは、亜鳴きん類(アリドリ、オニキバシリ、タイランチョウ類、ハチドリ、ミソサザイ類)旧大陸にも1種進出したが新大陸起源、コスタリカには22種マイコドリ類などが北上し、逆に北米からはキツツキ、ツバメ、ツクミ、カケス類など比較的私達に顔なじみのグループが南進した。また中米起源と思われるアメリカムシクイ類なども含め、アメリカ大陸のへそ、コスタリ



Bravlio Carrillo National Park.  
樹冠の黒点は Hawler Monkey.

カには南北からの多様な鳥が混入、進化したのである。

Stiles, G. 1983 Costa Rican Natural History. University of Chicago Press.

Stiles, G. 1992 La avifauna de U. C. R. y sus alrededores a través de veinte años. Revista de Biología Tropical 38: 361-382.

アリドリ Antbirds - Family Formicariidae Antshrike, Antwreio, Antwren など

トロゴン Trogon - Order Trogoniformes Family Trogonidae の鳥。ケツァールも含む。日本名: キヌバネドリ  
オニキバシリ Wood creeper Family Dendrocolaptidae.

タイランチョウ Tyrant Flycatcher Family Tyrannidae  
アメリカ大陸のヒタキ

マイコドリ Manakin Family Pipridae

## 学会改革の経過報告

会長 森岡弘之

学会改革に関するアンケート以後の改革の進捗状況について報告したい。本年4月の評議員会で、1993/94年度の会長に山岸哲氏、副会長に藤巻裕蔵氏が選出された。また、アンケート調査の結果に沿った方向で会則を改正することが基本的に了解され、会則改正の骨子ならびに新会則の草案作成委員（森岡・山岸・唐沢・福田）を決定した。

新会長・新副会長の人事も会則改正案も来る10月の総会で承認されねばならないが、過去2年間にわたって検討を加えてきた学会改革は、これで一区切りついたと言えるであろう。ふり返ってみると、この2年間は長かったようでもあり、短かったようでもあった。私自身は改革案にまだいくつもの不満点があるのだが、当初はまとまる見込みのほとんどなかった学会改革をとにかく軌道に乗せただけでもよしとしたい。

しかし、これからの学会運営こそ改革の正念場であることは、私自身がいちばんよく知っている。この機会に、新会長に山岸氏が推薦されたのは、改革を定着させ、学会を一層発展させるためには、山岸氏の行動力と見識が不可欠と考えられたためである。

新会則の骨子となる会則改正案の要項と学会運営の基本的体制は以下のとおりである。その内容は、アンケート結果をほぼ全面的に受け入れたものとなっている。

①会長 任期は2年。候補を立てて会員による直接選挙で選出し、連続3選を禁止する（連続2期までとする）。候補者は、会員5名以上の推薦（ただし、推薦人の氏名は掲載しない）、もしくは本人の立候補とし、選挙管理委員会が確認する。

②副会長 任期は2年。評議員会で選出し、連続3選禁止。

③評議員 定員15名以内。任期は2年。会員による直接選挙で選出し、連続多選可（現行どおり）。

④常任評議員 定員3名。任期は2年。評議員の互選で選出し、連続3選禁止。常任評

議員会は会長・副会長・常任評議員で構成し、日常の学会運営にあたる（常任評議員会・常任評議員は新設）。

⑤幹事および幹事会は廃止する（編集幹事は正・副編集委員長、ニュース幹事はニュース編集長となる。庶務・会計は常任評議員会に移行）。

⑥編集委員会と評議員会の分離 評議員会には正・副編集委員長のみオブザーバーとして出席できる（現行では編集委員・幹事・監事は評議員会に出席できたが、新会則ではオブザーバーは正・副編集委員長と監事に限られる。つまり、学会誌の編集関係以外の学会運営は、選挙で選ばれた会長と評議員だけで行なう）。

⑦名誉会員・永年会員・学生会員は現行どおりとする。

⑧事務局は会長のもとにおき、事務局員（パート新設）は会長が管理する。

⑨会費は当面値上げしない。

学会改革の眼目のひとつは、会長の選出法・多選禁止とならんで、学会にパートの事務局員をおき、会長がパートの（つまり学会事務の）責任をとることである。会長は、学者としての業績も勿論だが、管理者としての実務能力にもすぐれていなければならない。今、私が心配していることは、会員が真に会長にふさわしい人を選んでくれるかどうか、である。もし会長選挙が人気投票や特定のグループに支配されるようなら、会長選出は評議員会に戻さねばならなくなるだろう。会員の良識に期待したいところである。

それと、できるだけ早くに、通常事務は学会センターのような外部団体に委嘱し、会長の責任を軽くすることが重要である。会長が常任評議員・事務局員に頼りすぎると、彼らは勝手なことをするようになり、会長職は形骸化するであろう。山岸会長の誕生に伴い、学会事務所も大阪市立大学へ移ることになるが、学会事務所の持ち回り制も一長一短があるので、試行錯誤が必要であろう。

## 鳥類マーキング登録・調整委員会設置のお知らせ

近年、鳥類の調査・研究のためカラーリングやタッグなどの装着、染色などでマーキングをする場合が急増しています。しかし、ほとんどの場合、個人の調査計画に基づいて実施されていて、同じ種について異なる調査があっても調整は行われていないのが普通ようです。また、当事者の間で事前に調整を行おうとしても、現状では困難な場合が少なくありません。すでに同一のカラー標識装着が行われた例もあり、このままでは、今後ますます混乱が多発することが予想されます。

そこで、これらの問題に専門に取り組む鳥類マーキング登録・調整委員会（マーキング委員会と略す）が、昨年、日本鳥類標識協会内に設置されました。委員会では、以下のような活動を行います。

1. マーキング委員会は特定の鳥種あるいは鳥種のグループの登録担当者を選出します。
2. 登録担当者は、担当する種のマーキング実施状況を集計し、日本鳥類標識協会誌に報告して、担当の鳥種および鳥種のグループのマーキング情報を公開します。
3. マーキング委員会はマーキングされた鳥の確認情報を収集し、登録担当者に連絡し、担当者はマーキングを実施した人と情報交換をします。
4. 登録担当者およびマーキング委員会は新たにマーキングの実施を予定している人と、マーキング方法の打ち合わせおよび調整を行います。
5. マーキング委員会は、海外のマーキング実施団体および個人と情報交換・調整を行います。

対象となる鳥類は日本で見られる全種で、外国で行われたマーキングも含まれます。なお、日本鳥類標識協会は鳥類標識調査関係者で構成された団体です。学術研究目的のみで捕獲許可を取得された方々にもマーキングの登録・調整作業に協力していただきたいと考えています。

〒270-11 千葉県我孫子市高野山 山階鳥類研究所

日本鳥類標識協会鳥類マーキング登録・調整委員会（0471-82-1108）

## 第21回国際鳥学会議

1994年8月20～25日にウィーンのホフブルグで第21回国際鳥学会議（XXI International Ornithological Congress）が開催されます。前回のニュージーランドでの大会に参加された方には、3月下旬に1st circular（案内）が送られて来ていると思いますが、それ以外の会員で参加されたい方、または興味がある方は、

XXI IOC, Interconvention, Friedrichstrasse 7, A-1043 Vienna, Austria

TEL: 43-58800-106 FAX: 43-1-5867260 へ問い合わせ下さい。

会議の前後にいくつものエキスカージョンが用意され、アマチュアでも気軽に参加できる国際会議です。またこの会議に参加される若手研究者には伊藤基金から25万円の補助が出ます（no. 47参照）ので、若手の方は奮ってご参加下さい。

## 第5回国際行動生態学会議

IOCの前、1994年8月14～20日にイギリスのノッティンガムで第5回国際行動生態学会議（ISBE94）が開催されます。興味のある方は2nd Circularを、至急、下記までご請求下さい。

ISBE 94, Conference Nottingham, The Business Information Centre,

309 Haydn Road, NG5 1DG, U. K.

## 第6回国際生態学会議

IOCとはほぼ同じ日程で、1994年8月20～26日にイギリスのマンチェスターで第6回国際生態学会議 (INTECOL=International Congress of Ecology) が開催されます。申し込み〆切は9月15日。参加されたい方、または興味のある方は 2nd Circular を下記までご請求下さい。

VI INTECOL, The Manchester Conference Centre, U. M. I. S. T.

P. O. Box 88, Manchester, M60 1QD, U. K.

### お知らせ

〈前回の鳥学ニュースに同封された郵便振替払込用紙で会費を納入された方へ〉

利用された振替払込用紙は、松山で開催予定の鳥学会大会参加経費払込用のものです。したがって、大会準備事務局に送金されたこととなっています。すでに、数十件の会費またはその一部と考えられる送金が大会事務局に入っていて、開催準備に支障を来す恐れがあります。送金された方は、学会事務所に葉書でお知らせ下さい。

〈学生会員の会費納入方法について〉

今年度から、年会費が3,000円の学生会員 (高校・大学・大学院生および主として学業に従事している方) の制度が設けられました。しかし、会費の納入規定が守られていない場合が少なくないので、再度お知らせします。会費納入時に振替払込書の通信欄に、身分を証明する指導教官の署名・捺印を記して申告して下さい。署名・捺印のない場合は普通会员として処理します。すでに今年度会費を納入された方は、連絡下されば学生会員に変更します。ただし、返金のための事務作業と経費節減のため、下記のように処理させていただきます。超過の2,000円は1994年度会費の先払い分とし、申し出があった場合のみ返金します。 (会計幹事)

〈訂正〉no. 47 p.12 大阪市大のFAX番号を06-605-2522にご訂正下さい。

原稿送付先：〒105 港区芝3-1-14 日生赤羽橋ビル6F WWFJ

花輪伸一 (03-3769-1711, FAX: 03-3769-1717)

原稿はワープロ使用の場合も1行20字でお送り下さい。

次号 (no. 49) 原稿〆切は9月20日、発行は11月1日です。

### 編集後記

- 国際シンポジウム「ツルと湿地の未来」に参加して、つくづくと研究者に国境はないと感じました。(成)
- 6月27日、関西自然保護機構主催のシンポジウム「絶滅のおそれのある生物種の保護とは何か」が開かれた。種の保存法では38種(亜種)の鳥類が希少種とされている。「絶滅」について、もっととり組むべきかも知れません。(花)
- 今度はバンの23卵巣。記録更新! ヨシゴイの巣にもバンの卵! 秋に発表します。(K)
- 今年は天候不順のせいかハシブトガラスに徹底的にやられました。(O)

## 鳥学ニュース No.48

1993年8月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒169 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館内 Tel. 03-3364-2311

発行人 森岡弘之

印刷所 添田印刷株式会社

編集 花輪伸一・大堀 聡・成末雅恵・藤田 剛・上田恵介(幹事)



# 日本鳥学会1993年度松山大会案内 (第2報)

鳥学ニュースNo.47 で既にお知らせしましたように、今年度大会は愛媛県松山市にて、10月9日(土)～11日(月:振替休日)に開催されます。本大会では、会員の皆様による一般講演および自由集会のほか、シンポジウムと招待講演を予定しております。

## シンポジウム【環境の改変と鳥類の生態】

日時: 10月9日(土) 13:00～17:30

会場: 松山市 市民会館 大ホール(松山市堀之内)

- |                               |                |
|-------------------------------|----------------|
| 演題: 『日本における自然環境の変遷と鳥類の生活』     | 樋口広芳(野鳥の会・研究セ) |
| 『鳥類における重金属蓄積の変動要因をさぐる』        | 市橋秀樹(愛媛大・農)    |
| 『有機塩素化合物の蓄積とその毒性影響 -五大湖を中心に-』 | 田辺信介(愛媛大・農)    |
| 『海鳥を脅かすプラスチックペレット』            | 小城春雄(北大・水産)    |
| 『都市環境と鳥の生態』                   | 唐沢孝一(都立城東高校)   |
| 『鳥害問題の現状と対策』                  | 中村和雄(農研センター)   |
| 『狩猟』                          | 阿部 學(森林総研)     |

## 招待講演

日時: 10月10日(日) 午後

会場: 愛媛大学 教養部 大講義室(松山市文京町)

講師: A.P.メラー博士(スウェーデン・ウプサラ大学・動物学科)

演題: 『性の淘汰と鳥の美しい羽の進化』

本大会の参加申込締切は、8月20日(金) 必着となっておりますので、特に講演をご予定の方はお忘れなきようお願い致します。また、講演をご予定でない方も、事前登録をなさいますとお名前が講演要旨集に掲載されます。大会の詳細と申込書(青色)、および宿泊と交通のご案内(ピンク色)は、鳥学ニュースNo.47 と一緒にお送りしておりますが、紛失等により改めてご入用の方は、下記の大会準備事務局までご請求下さい。申込用紙はコピーしてお使い戴いても結構です。なお、本大会では、ご参加になれない方のために、講演要旨集のみの販売も行ないますのでご利用下さい。

日本鳥学会1993年度大会準備事務局

〒790 愛媛県 松山市 樽味3-5-7

愛媛大学 農学部 環境化学研究室内

TEL 0899-41-4171 内線391,392,369

FAX 0899-43-5242

(大会実行委員長: 立川 涼)

郵便振替 名 義: 鳥学会93

口座番号: 徳島 7-26239

大会開催時連絡先(会場直通)

: TEL 0899-26-0803